

沖

俳句雑誌[おき]

6月号

沖 発行所

寸分 能村 研三

三つの吟行会

川崎・東扇島

寸分に荷役の車列春闌くる

春がすみ航路信号0とあり

海市なか着陸進路さだかなり

カーナビに逆らひ行けば夏の沼

例年「沖」の東京句会は、四月と八月の二回を吟行会に企画しているが、本年は五月の末に五百号記念の吟行会が東京の浅草で行われることから四月の吟行会は中止した。その代りという意味ではないが、三月三十一日から四月一日にかけて「関西交流吟行会」と銘打って奈良支部の協力を得て明日香を吟行地に開催された。関西は久しぶりであったことから、関東からも多くの方々の参加があり総勢四十人の会となった。又、一部の人は一日前から奈良入りし、東吉野の先師登四郎の句碑を訪ね、地元の俳人の藤本安騎生先生も同行くださった。先生のご案内で「句碑洗い」を行うことが出来た。三十一日は、時折春の雷が明日香の空にどよめく天気となったが、皆それぞれが古代ロマンの里での吟行に収穫の多い旅となった。

海市とも見紛ふ遠の石舞台

千田 百里

ゴールデンウィークの一日目の四月二十八日には二つの吟行会が行われた。一つは全国俳誌協会の春の吟行会で、私がこの会の副会長を務めていることもあり、又前回の秋の吟

若葉して鎮守けやきに氣を貰ふ

垣手入れ庭師は黒の身ごしらへ

小満の風や暝る蒸し夕オル

起き伏しに徐行のすすめ柿若葉

竜巻の芯のうねりと迅雷と

乏月の予報確率外れをり

行会は市川で開催していただいたことから「沖」神奈川支部例会を兼ねて、川崎の工業地帯である東扇島の臨港施設の「マリエン」が会場となった。この会には四十五名中私を含めて十五名が「沖」から参加し、他流試合の句会で森岡正作さんが一位をとり「沖」の面々も良い成績を収める吟行会となった。

海底に都市あるごとく霞みをり

森岡 正作

もう一つこの日には、京葉支部が主催する吟行会が若葉の美しい市川の中山法華経寺周辺で行われ、市川のまち案内人の解説でそれぞれが散策した。二十五名の参加で多くの収穫作品があつたようだ。

五重塔仰ぎ手鳴らすラムネ玉

成宮紀代子

この三つの吟行会はほぼ皆さんの自主的な発意によつて行われたが、いずれも多くの方々に参加され充実した会になつたようだ。

さて、今月末には五百号の記念大会、そして翌日の吟行会は百名を越える参加者と聞いている。開業したばかりの東京スカイツリーで浅草周辺の下町は普段になく賑わっていることだろうが、いかにみなさんが良い句を詠むかが今から楽しみだ。

蒼茫集



くれなゐ

岡部 玄治

春遅々と墓石のはじく柄杓水
菩提寺の水甘し梅芽ぶき初み
流すとき突然ひひな目を覚ます
ちちははの天寿宜ひ鳥雲に
くれなゐのはつはつ雨後の芽吹山
七回忌くる母植糸し桃咲いて

石に問ふ

千田 百里

海市とも見紛ふ遠の石舞台
かぎろひて埋め戻されし塚巡る
かぎろへる明日香は石に問ふがよし
甘樫の丘惜春の貌・顔・かほ
霾天や父情といふはこそばゆく
十三日金曜佐保姫同道にて寧し

踏切

安居 正浩

春の旅外す心の鍵いくつ
未来あるもののひしめく苗木市
踏切の音より春の暮れてくる
光とは違ふ明るさ花辛夷
桜満開だれかに呼ばれぬるやうな
吸ふ蜂も吸はるる薬も恍惚と

翼

荒井千佐代

島々に生まるる浮力諸芽出て
茎立ちや人に倦みまた我に倦み
ぶらんこを降りむ翼をたたみけり
屈葬の形に目覚め鐘おぼろ
鳥雲にバス折り返す「耶蘇落し」
出漁の船に灯の入る桜かな

一灯の域 北川英子

かの日以後海市といふを詠めずをり
一灯の域をゆるゆる花筏
春愁の出口探しの航空券
並びぬしがふと居なくなる花吹雪
あとかたのなきが遊びよしやぼん玉
亀鳴くや深吉野遠く想ふ夜は

背丈 辻直美

風すこし春の光を研ぎにけり
夫はもう逃水よりも遙かにて
春あらし棄民にも似て家籠り
春の風邪回復どきの子の無聊
洗剤であらふ眼鏡やすみれ咲く
子どもらの背丈に飛んで初蝶来

恋 辻美奈子

百千鳥上代の恋おほどかに
さへづりをただ聞くだけの日なりけり

天空の鏡を割りて四月くる
あかんぼの涙まるまる木の芽風
エイプリルフル珈琲を三度淹れ
誤植追ふ動体視力蝶の昼

白変幻 千田敬

春光の天降る一条一会旅
おぼろ夜の酔を嘔み飛鳥人ごち
白といふ変幻のいろ春霞
青き踏む地下に千古の天体図
甘樫^{あまかし}丘にひむがし問ふも養花天
今といふ刻深く吸ひ花万朶

春風 遠藤真砂明

ト口箱に朝日が躍る桜鯛
風見岩より春潮の大眺め
釣りあげし波のもつるる菜種河豚
生きるとはポートルースの一直線
はらわたを断ちて十日の春嵐
傷を癒すと花冷えの荒療治

舩ひ杭 渡部節郎

どこまでを枝と言ふべし糸柳
大望に慎み深き木の芽かな
清明の潮満ち来る舟溜り
海苔あぶる瞬の炎の色のりの彩
舩ひ杭伸び縮みする日永かな
和布刈る男波に柳を解くかに

生きるとは 渡辺輝子

尖塔点滅蛇行の川のおぼろめく
生きるとは佳き日悪しき日しやぼん玉
玄室石舞台の重しおもしろと桃の花
二面石めぐれば春雷一度きり
悠久の大和帰雁の空のこり
飛鳥仏の慈悲の尊顔うららけし

古代米 宮内とし子

末弟の清めし句碑に風光る
踏青や古代史の里石づくし

桃咲くや棚田守れる吉野人
春夕焼棚田は深く翳をおき
山裾の烟も宇陀の遅き春
春の雨しつかりと噛む古代米
うまし国 藤原照子

語部と後の語らひ春ともし
朧夜のラジオの間合ひよき言葉
草萌や飛鳥に謎の石あまた
あたたかや大和ことばに応へられ
うまし国明日香春雷駆けぬけり
雉子のこゑ飛鳥仏守る堂小さし
緞帳 久染康子

暮れ際に浮力の生るるさくら山
桜蔭降る年輪ひとつ増えにけり
水栽培の三葉出窓に子の新居
東風明日香三句荒れの緞帳重し石舞台
揚ひばり飛鳥の空を鋤き返す
尼寺の真白き築地陽炎へり

吉野路 森岡正作

明日香路の戸口覗けば残る雛
胸中に先師のしだれざくらかな
吉野路の窪太々と蝌蚪の紐
碑の文字の舞ひたき夕朧
蛇穴を出でて私に驚けり
ベンチみな背中合はせの花疲れ

砥石 細川洋子

青空は大きな砥石燕来る
わなわなと火焰開きの牡丹の芽
路地遅日ブリキの玩具かたかたと
石畳辿り日永の神楽坂
直情の青あふれしめ葉ゆる
列島の籬ゆるめつつ散るさくら

幣辛夷 菅谷たけし

飛鳥京霞みて方位盤頼る
春驟雨墨絵ぼかしの古墳村

雨止んで梅が香つよき明日香村
幣辛夷村は男綱に守られて
鶯や地霊返しの餅かも
青き踏む明日香に石と陵と

雨脚 松井志津子

川の面に絹の雨脚仏生会
さくら咲くこの国富むや貧しきや
さういへば休眠口座山笑ふ
牡丹雪人攫ひゆく路線バス
乗り継ぎの列車かげろふより現るる
検札車掌の深き一礼山笑ふ

霞立つ 酒本八重

霞立つ向う明日が見えますか
麗かや八十路のランチタイムとは
小鳥の巣産座ととのひお伽めく
陽炎のやうに論してくれし人
卒業や衣裳ケースの二つ殖え
戦慄が走る暮春の地震予告

潮鳴集

二十三区

林昭太郎

ふらここの子を空へやる手の加減
囀の真ん中に引くプルトップ
花冷や画鋏にのこる紙の角
烏雲に遺跡といふも穴五つ
朧夜の二十三区をめぐる水

楽湧く

大沢美智子

縄文の楽湧くごとし青き踏む
カーナビの道はここまで蝌蚪の紐
春雷や巨石の謎は解けぬまま
春愁や明日香壁画の女人どち
離宮出て引潮に乗る花一片

花人

小嶋洋子

花の雨マナーモードのやうな日よ
木蓮の表裏まちがへてはぬぬか
振り向けば花人となる歩道橋
瓶に浮く高麗人参養花天
糸ひかれ風船したに弾みをり

かざぐるま

七種年男

伊吹嶺の色を含みて柳の芽
麦踏んで風のしぶきを浴びにけり
風船の紐に子の声牽かれをり
かざぐるま風を回してをりにけり
陽炎は念力に似て仁王門



沖作品



能村研三選

雪解水優しさのみで生きられず

頬白や木々に力の漲りて

鳥帰る帰りたくなきものも連れ

いぬふぐり風の記憶を手操りけり

春眠や心ゆくまでとはいかず

水平線眩しく花菜風生るる

人並でよし其れがいいおらが春

どこまでも青麦畑風満てり

ゆるゆると蝌蚪の紐解く薄日かな

熊谷草一輪生けて母衣あかり

早春の口の端ふいと革命歌

うまく出ぬ修正テープ日の永き

息深く吸へり何処かに沈丁花

鐘の音の間合はかれる遅日かな

春あらし明るき月の残りけり

東京

中田とも子

千葉

上田 玲子

市川

荒井千瑳子

囀やつぶやきノートある駅舎

湾明くる潮目に海苔の育ちけり

べた風の沖に日のあり菜の花忌

かげろふに土蔵沈める鬼瓦

エスケープ愉し春昼の保健室

春満月都明日香の海鼠壁

背の違ふクレヨン十本鼓草

生きてれば生きてればこそつくづくし

しやぼん玉割れて三丁目の夕日

復興の音聞きて蛇穴を出づ

武家門は薩摩の気骨春荒るる

潮待ちの四つ手網吊り春浅し

梅真白造酒屋の朝搾り

病む鶴の帰心のつばさ草青む

鶴唳の響もす宿の春炬燵

茨城

岡澤 田鶴

千葉

浅野 吉弘

長崎

水木 沙羅

沖作品 15句選評

*
能村研三

雪解水優しさのみで生きられず 中田とも子

「優しさだけでは生きられない」という歌をドリカムが歌っていたと思う。一般的に、「優しさ」とは「寛容である」こととされている。「心が広くて、よく人の言動を受け入れること。他の罪や欠点などをきびしく責めないこと」。しかしこの優しさも一歩間違えると「手ぬるい」ことにもなりかねない。厳しい冬、雪に閉ざされた地も雪解と共に、春が一気にやってくる。また、人間の新たな生活が始まるが、人に対してももちろん優しさは常に必要なが、それだけでは生きていけず、時には厳しさも必要となってくる。

水平線眩しく花菜風生るる 上田 玲子

春の房総の風景を思い浮かべる。おおらかでのびのびとした

句である。花菜風は菜の花を吹く風。菜の花が咲きほこる小高い丘からは、きらきらした春の海が見える。かぎりなく水平線までが望めて気持ち軽やかである。海は群青の色に。その色への感動がある。菜の花の黄色をイメージさせる花菜風と、海の群青のコントラストが美しい。

早春の口の端ふいと革命歌 荒井千瑠子

荒井さんは私と同じ団塊世代。革命運動とは関係はなかったものの、この頃歌っていた歌が懐かしい。ここに作者の青春があったのかも知れない。よく歌声喫茶などというものもあり、ロシアの歌、革命歌、反戦歌などが歌われていた。あれから何十年の歳月が経ったであろうか。家庭にいてふと口ずさんだ革命歌が懐かしく感じた。

湾明くる潮目に海苔の育ちけり 岡澤 田鶴

東京湾は昔から江戸海苔の生産地として海苔ひびがあった。湾に注ぐ多くの河川からは肥沃な関東平野の豊富な栄養が運ばれ、色と味と薫りの豊かな海苔が育てられた。海水温の上昇と潮目の変化は、海苔の生産にも大きな影響を及ぼすとも言われている。ベテランの漁師ともなれば、海苔に相応しい潮目もしっかりと読むことが出来た。

(以下略)